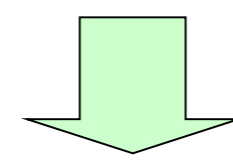


目的

崙徑部周囲の痛み(以下崙徑部痛)

- ✓キック動作を多用する競技に多く発症するといわれている。
- ✓器質的疾患を有する 경우가少なく、原因は不明確とされている。
- ✓治療が難渋することが多い。



- サッカー競技に限定し、中学生、高校生、大学生サッカー部員に対し、崙徑部痛の実態を調査した。

方法

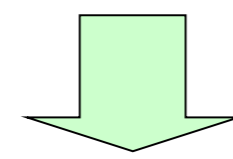
- サッカー部所属男子学生438名に独自に作成した調査用紙を配布

(個人情報保護に関する誓約、および研究に対する同意書を含む)

内訳: 中学校3校100名、高校5校214名、大学3校124名

調査期間: 2008年9月~11月

質問内容: 1)身長・体重, 2)競技歴, 3)崙徑部痛発症有無, 4)発症があった場合⇒発症時期



348名回答(中学87名, 高校158名, 大学117名:回答率79.5%)

方法2(分類と統計処理)

- 発症率, 崙徑部痛の有無による競技期間を

- カテゴリー別: 中学生, 高校生, 大学生
- 競技期間別: 6年以下, 7年以上9年以下, 10年以上11年以下, 12年以上
(Q1=6, Me=9, Q3=11)

それぞれ検討した。

- 統計学的検定方法

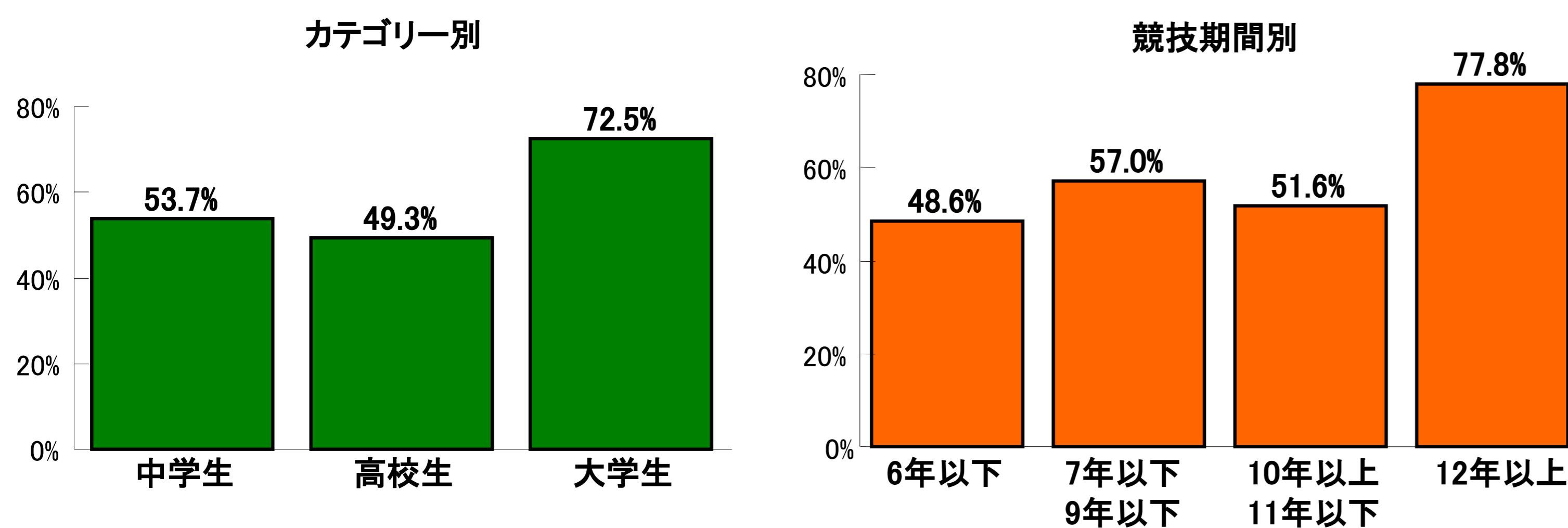
- 発症率: χ^2 乗検定
 - 崙徑部痛の有無による競技期間: Mann-Whitney検定
- それぞれ有意水準は5%未満とした。

結果

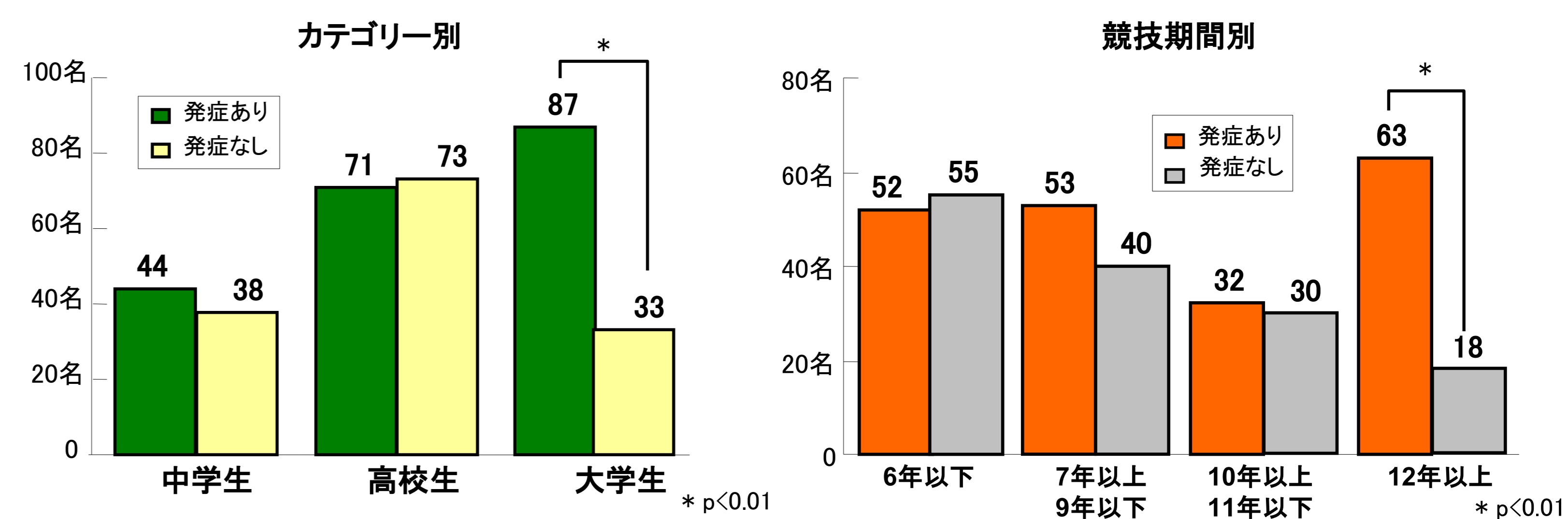
- ✓回答者情報

カテゴリー別	人数	年齢	競技期間	競技期間別	人数	年齢	競技期間
中学生	83	13.1±0.7	4.6±2.4	6年以下	107	14.6±2.4	4.2±1.8
高校生	144	16.4±1.0	7.8±2.4	7年以上9年以下	93	16.2±2.1	7.9±0.9
大学生	121	20.2±1.3	12.1±3.0	10年以上11年以下	62	18.1±1.9	10.4±0.5
				12年以上	81	20.3±1.5	13.8±1.5

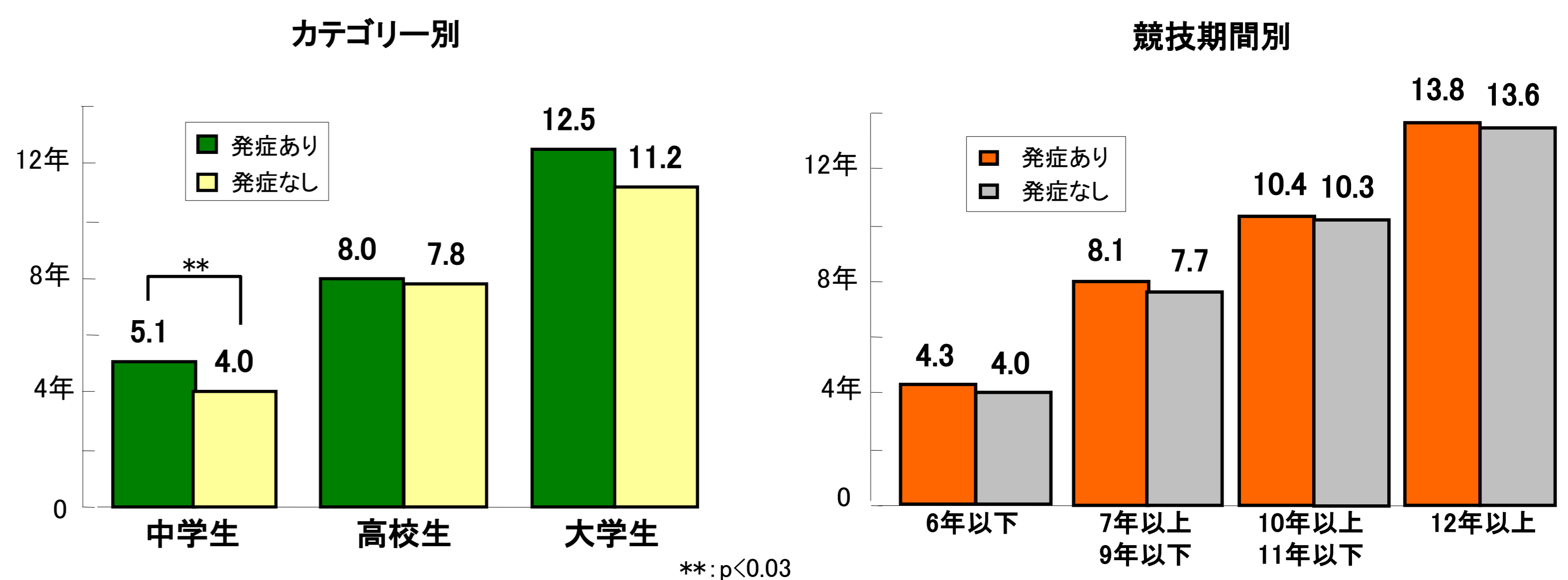
- ✓発症率



- ✓崙徑部痛の有無



- ✓崙徑部痛の有無による競技期間の差



- ✓発症年齢

カテゴリー別	発症年齢	競技期間別	発症年齢
中学生	12.1±1.8	6年以下	13.8±2.3
高校生	15.0±1.9	7年以上9年以下	14.3±2.3
大学生	17.5±2.5	10年以上11年以下	16.7±2.4
		12年以上	17.4±2.7

考察

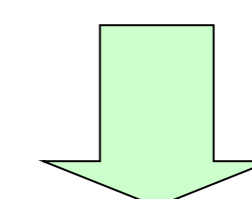
- 中学生, 高校生では約半数, 大学生では約3/4の選手が崙徑部痛を発症している。

- カテゴリー別での発症率

- ✓大学生での発症率が高い

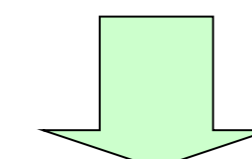
- 競技期間別での発症率

- ✓競技期間が短期間から、長期間へ向けて発症率が増加。



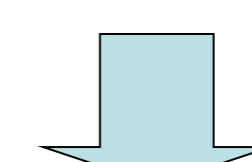
競技期間の長さが, 崙徑部痛の発症のひとつの要因になると考えられる。

- 発症時期 = 12歳から17歳(カテゴリー別, 競技期間別ともに)



崙徑部痛が比較的発症しやすい時期と考えられる。

しかし, 発症が現年齢付近に寄っている。



- * 以前の発症記憶が乏しく、最近の発症のみ記憶している可能性がある。
- * 低年齢で発症した選手は、その後競技を継続していない可能性があり、大学生等の発症では低年齢での発症ではなく、高年齢で発症したと考えられる。

まとめ

今後は、発症時期に注目し、競技現場で行える対策を講じることで、発症の予防を行い、さらに、この時期の選手の身体機能の検証や、サッカーの動作との関連も検証する必要があると考える。

